
巻頭言

2021年1月現在、私たちは「新型コロナ」と呼ばれる厄介なウイルスによるパンデミックの真ただ中にいる。いつ終息するのか目処もたたず、芝居、祭り、コンサート、ライブ、交流といった文化的な活動は軒なみ中止か延期。総合文化研究所も、オンライン講演をいくつか実施した以外は、ほとんど巣ごもり状態である。

2011年3月の東日本大震災から10年目の今年、本来なら津波や原発事故による被災者に思いを寄せ、これまでの経済活動や生活様式のあり方を根本からじっくり問い直すべき節目だというのに、それもなかなか思うにまかせない。

このような鬱々とした疫病の日々を、これまで人類はどのようにやり過ごしてきたのだろうか。

その昔、フィレンツェで流行った「黒死病(ペスト)」の惨状を恐れ郊外に「自己隔離」した10人の男女は、10日の間ひたすら話をしたり聞いたりしたとか。憂さ晴らしというわけだが、今の私たちに必要なのも言葉の力による心の治癒ではなかるうか。それも、「飾りじゃない」、真正の、産みだての卵のように新鮮で生命力にあふれた言葉。

カレル・チャペックがチェコ語で書いた戯曲『白い病』(原作1937年、阿部賢一訳、岩波文庫、2020年)では、ある国で恐ろしい伝染病「白い病」が急速に広がる。その特效薬を発明した医師ガレーンが、薬と引き換えに平和を手に入れるべく、たったひとりで権力者に立ち向かう。侵略戦争を止めて恒久平和を約束する国にしかこの薬は渡さない、というのである。「鉛や玉やガスで人を殺してもいいとしたら……私たち医者は、何のために人の命を救うのか?」。チャペックはこの医師を「平和のテロリスト」と呼んだ。

アルベール・カミュのフランス語小説『ペスト』(原作1947年、宮崎峰雄訳、新潮文庫、1969年)の舞台はアルジェリアのオラン市。ペストが大流行し、町が「ロックダウン」になる。医師リウーは身を粉にして疫病と闘いつづける。彼は「ペストと戦う唯一の方法は誠実さ」だと述べ、それを「職務を果たすこと」とも言い換えている。

この作品におけるペストが「悪」とりわけファシズムという全体主義を象徴的に表しているとするなら、リュドミラ・ウリツカヤが映画シナリオとしてロシア語で書いた『ペスト』(原作の執筆1978年、発表2020年)では、ペストの脅威がもうひとつの全体主義であるスターリニズムの恐怖と二重写しになっている。舞台は粛清の吹き荒れた1939年。ペスト防止研究所の研究員が誤ってペストに感染したのを受け、極秘裏に濃厚接触者が囚人護送車「黒いカラス」で「連行」されていく。ペストの感染拡大を防ぐため隔離に連れていかれると知らされなかったため、だれもが逮捕を覚悟したが、復活祭の日に無事生還した老医師カッセリは妻に電話する。

「心配ないよ! 生きてるんだから! ただのペストだったんだから!」

コロナ禍の私たちに相応しい言葉はいったい何なのだろう。

総合文化研究所長 沼野恭子

